



「構造図」を用いて情景を想像し解釈に結びつける
学習活動の提案：
小学校6年生教材「やまなし」の実践を通して

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2024-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黒川, 墨, 森, 健一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000110

「構造図」を用いて情景を想像し解釈に結びつける学習活動の提案

— 小学校6年生教材「やまなし」の実践を通して —

黒川 塁・森 健一郎*

北海道教育大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻・院生

*北海道教育大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻（釧路担当）

Proposal for a Learning Activity Using “Structural Diagrams” to Imagine Scenes and Interpreting Them:

“Yamanashi” as a Teaching Material for Sixth-Grade Elementary Students

KUROKAWA Rui and MORI Kenichiro*

Graduate Student in Advanced Teacher Professional Development Program, Hokkaido University of Education

*Advanced Teacher Professional Development Program, Hokkaido University of Education

概 要

本研究は、小学校6年生国語科における「やまなし」授業の難しさを捉え、効果的な学習活動を検討することを目的とし、「構造図」を用いた実践を行った。「やまなし」の教材としての難しさには作者独特のオノマトペ、造語を含む表現や、額縁構造となっている作品世界と対比的に描かれる「五月」と「十二月」の世界といった特徴的な構造が挙げられる。本稿は、「構造図」を用いることで、学習者が叙述を根拠として作品世界の解釈に取り組み、全体で読みを共有しながら「やまなし」の表現や構造を視覚的に捉える学習活動を試みた実践報告である。

「構造図」に表す活動を通して学習者が捉えた情景を交流することができ、読みの誤りや異なりに気づき、単元の展開や工夫のイメージが生まれる実践となった。

1. 問題の所在

「やまなし」は、宮沢賢治著の短編小説であり小学校国語科においては、甲斐睦郎他編著『国語六創造』光村図書出版に掲載されている教材である。6年生が学習する物語文教材として、「帰り道」

や「海の命」が掲載されているが中でも「やまなし」は学習者にとってはもちろん、教員にとっても扱いが難しい作品である。その理由として挙げられるのは宮沢賢治独特の世界観や、表現が多分に含まれている点であろう。山中吾郎（2003）は「やまなし」の難解さを以下のように整理してい

る。

『『やまなし』は難しい』という声をよく聞きます。「どう授業していいかわからない」という人もいます。ある実践家などは教育誌の中で、小学校の国語科教材の中で、最も難しい教材と書いています。中略「この作品の主題・思想は何か」とか「この教材で子どもたちにどんな力を育てるか」というようなことを考え始めると、とたんに難しさを感じます。〈クラムボン〉とかイサドとか、意味のわからないことばも出てくるし、死んだはずの〈クラムボン〉がまた笑ったり、何のためについているのかわからない「まえがき」と「あとがき」がついていたり……、わからないことがありすぎて、それでも授業をしなければならないと思うと途方に暮れてしまいます。

山中は「やまなし」の授業についてわからないことの多さから学習者側に留まらず、教えなければならない教員にも困難さがあることを述べている。

2. 「やまなし」の難しさ

2-1 「やまなし」独自の表現法

宮沢賢治は独特の表現を用いる。その中でも山中の述べる「意味のわからない言葉」である造語がより物語を複雑にさせているといえるだろう。中でもクラムボンは教室内で多様な解釈がなされているが正解と呼べる解釈は存在しない。クラムボンの扱いについて山口憲明（2013）は以下のように述べる。

さらに登場人物「クラムボン」です。「クラムボン」が、現実の自然界に生息する何にあたるのだろうかという議論は、いらないと思います。クラムボンは、谷川にいて笑う生き物です。かぶかぶ笑う、はねて笑う生き物です。「クラムボン」という名称から想像される生き物です。

子どもたちは、これらの文章表現にそって、「クラムボン」というものをイメージ化するのは。これらの表現からイメージ化される生き物が、クラムボンです。それが、物語の読み、物語の世界です。

山口はクラムボンの存在を現実世界の生物に当てはめる議論が不要であると述べ、物語から学習者が想像した生き物、学習者がイメージした生き物こそがクラムボンと整理している。また、佐々木俊幸（1986）はクラムボンに対し以下のように述べている。

クラムボンが何者であるかの詮索もまた無用である。クラムボンという片仮名表記の、このはずみのある語感を持った生き物をイメージすれば足りる。きめ細やかな読みということ間違っではいけない。

佐々木も山口と同様にクラムボンの詮索を不要であると述べる。稿者も山口、佐々木の考えに概ね賛成である。クラムボンが何者であるかを考えることは、表現に着目し作品の世界に触れ、自己の読みの解釈と結びつけるための大切な問いとなる。クラムボンは各々の想像力、発想が許される部分であり、学習者にとって周りとの解釈の違いに触れることができることが宮沢賢治の表現の魅力である。しかし、学習者の解釈も多様であるため教員にとって展開が読みづらく、作品としての魅力が教材としての扱いづらさと切っても切り離せないことが「やまなし」授業の難しさの一つとして考えられるだろう。

「やまなし」に描かれる宮沢賢治の独特の表現に着目したとき「この教材で子どもたちにどんな力を育てるか」という点において小学校の国語科教材の中で、最も難しいという意見には了解せざるを得ない。6年生が学習する「帰り道」と「海の命」の両者と比較してもやはり「やまなし」は難しさを強く感じる教材である。

また、「やまなし」では単元の中に宮沢賢治の

伝記である「イーハトーヴの夢」が資料として位置付けられている。これは「やまなし」本文だけでは捉えることが困難な世界観や主題を捉えるために、宮沢賢治のものの見方・考え方を知り、読みの拠り所とするために扱うのであろう。「やまなし」は「イーハトーヴの夢」が扱われる状況を踏まえても「やまなし」授業の難しさが窺える。

2-2 「やまなし」の構造

前項では、クラムボンを中心に表現という観点で教材としての難しさに触れた。しかし、「やまなし」の難しさは表現に留まらない。本項では「やまなし」という作品の構造について整理していく。作品には必ず作品世界の設定や世界観といった構造がある。山口は「やまなし」の構造を以下のように整理している。

この物語は、前書き、「五月」の場面、「十二月」の場面、後書きで構成されています。前書きにあるような場所は、小さな谷川の底。この物語は、その底で見た世界を写した幻灯です。幻灯とは、今で言えば映画と言って良いと思います。読者は、映画のように「五月」と「十二月」の場面を見ていきます。

「やまなし」は大きく4つに分けられ、「五月」と「十二月」の世界は二枚の幻灯として表される。白石範孝（2016）は自身の実践において「やまなし」の構造を以下のように整理している。

冒頭の一文「小さな谷川の底を写した、二枚の青い幻灯です。」と結末の一文「私の幻灯は、これでおしまいであります。」で、中の「一 五月」と「二 十二月」という額縁に入った二枚の幻灯の世界を表すという独特の「額縁構造」となっている。

この構造によって、冒頭と結末の二文が作者である宮沢賢治の視点で描かれ、中の二枚の幻灯が「かにの子どもら」の視点で描かれるという二重構造を持っている。

白石は、「五月」と「十二月」の額縁構造を踏まえ、構造によって視点が宮沢賢治とかにの子どもらの二つの視点で語られる特徴があることを整理している。「五月」と「十二月」は、対極的に描かれ対比されている。山口は「やまなし」の構造を主題に触れながら以下のように整理している。

この物語は、「五月」と「十二月」の二場面構成されています。「五月」と「十二月」は対比の関係です。具体的には、魚を取って食うかわせみとその実（身）をかにの親子に差し出すやまなしとの対比です。対比は後者を強調します。つまり、「十二月」の場面に、『やまなし』の主題はあるのです。

山口は「五月」と「十二月」の対比を、かわせみとやまなしの対比であると述べる。かにの親子に恐怖を与えるかわせみと、喜びを与えるやまなしの対極的な描かれ方を捉えることは作品の主題や読みの解釈に関わってくる。

東京学芸大学国語教育学会（2023）は文学的文章における対比について以下のように整理している。

文学的文章では、対比的な表現が使われることで、表されていることが印象づけられより豊かに読み味わうことができます。

例えば、今は寂しい場所について、以前に賑やかだったときのことが対比的に表現されると、寂しさが際立ちます。（中略）

対比的な表現に着目して文章を読むと、作者の工夫や伝えたいことに迫ることができます。

対比を扱うことは、作者の工夫や伝えたい思いに迫ることや際立った表現に触れることができる点で効果的であるようだ。「やまなし」は山口も述べた通り、タイトルとなるやまなしが「十二月」にのみ登場するため、後者である「十二月」を強調しているといえる。授業を通して、「五月」と「十二月」の対比を捉え作品名である「やまなし」は

なぜ「十二月」にしか登場しないのか、かわせみとやまなしの違いは何か、そこに隠された宮沢賢治の工夫や意図はどのようなものであるのかについて考えを巡らせることは作品を読み深めることに繋がる重要な観点である。

また、対比をどのように学習者に与え、深めていくかが「やまなし」の構造を捉えるには欠かせない要素なのではないだろうか。二項では「やまなし」を扱ううえで、表現の独特さと作品の構造の特徴について整理を行った。次項以降では小学校6年生国語科「やまなし」の授業における効果的な学習活動の提案を研究の目的とし、現行の教科書での扱いはどのようなものになっているか捉え整理する。また、整理を踏まえ実際に行った実践の考察を行う。

3. 教科書の分析

『国語六創造』には本文の前に「作品の世界をとらえ、自分の考えを書こう」と見出しがある。さらに「作者の独特な表現を味わおう」「作品に描かれた世界を、表現や構成から自分なりにとらえよう」と二つの目標が設定されている。上記の目標を踏まえ、「構造と内容の把握」では語りの視点に着目し以下のように記載されている。

最初に、「小さな谷川の底を写した、二枚の青い幻灯です。」とある。どこから見た、どのような風景がえがかれているだろう。本文から谷川の様子が見えるところを見つけ、簡単な絵や図に表そう。

「どこから見た、どのような風景」との記載から語りの視点を踏まえて捉えることが求められている。一項で述べたように「やまなし」は、前書きと後書きは作者の視点から語られ、「五月」と「十二月」はかのにの親子の視点で語られている。つまり、かのにの親子の視点から谷川の底にどのような情景が広がっているのかを学習者に捉えさせる必要がある。

「五月」と「十二月」の世界を俯瞰して見るのではなく、かのにの親子の視点で見るのが重要になる。かのにの親子は底に体をつけた状態で谷川に存在している。そのため、「五月」と「十二月」の世界の視点は上や横から見ではなく、底から上を見上げる構造になっていることを捉えなければならない。本文にも「にわか天井に白いあわが立って、」とあることから水面が天井として描かれていることがわかる。このことを踏まえなければ魚が上へ上ったり、戻ってきたりする描写では本来、川上から川下への横移動であるにも関わらず上から下への上下移動と誤って捉えてしまうことが想定できる。

細かな部分ではあるが、視点がかのにの親子にあることを知ることは情景を想像するうえで誤った捉えにならないために重要である。手引きに記載があるように構造を把握するために語りの視点を捉えることは欠かせないものである。

次に、「精査・解釈」の部分である。一つ目に以下のような記載がある。

「やまなし」には、作者の独特な表現が多く用いられている。心を引かれる表現に線を引き、情景を想像しよう。

宮沢賢治独特の表現を読み味わうことを求めているのだろう。また作者の独特な表現として「かぶかぶ」「つぶつぶ」などのオノマトペ、「日光の黄金は、夢のように」などの直喩・隠喩が挙げられている。作者の独特な表現について線を引き情景を想像することは確かに表現に着目することに繋がる。しかし、学習者が実際に情景を想像することができるのか疑問である。独特な表現であるために、学習者にとって魅力と難しさが混在しているのではないかと感じる。情景を想像するためには、教員側からの想像に向かうための具体的な手立てが必要なのではないかと感じる。二項で「やまなし」の難しさについて整理したが、教員でさえよくわからないと感じるものを学習者の想像に任せってしまうことが果たして適切なのか疑問である。

二つ目は対比についてである。「五月」と「十二月」の対比について「かにの親子の会話や様子」「水や光の様子」「上から来たもの」の三つに着目させている。上記の点はそれぞれかわせみとやまなしが与えた周りへの影響を捉えさせるために設定しているのだろう。「精査・解釈」には続けて以下のような記載がある。

なぜ、作者は、「十二月」にしか出てこない「やまなし」を題名にしたのだろう。理由を考えてみよう。

三つ目では主題に繋がる部分である。対比されている二つの場面を捉えることを通し、「やまなし」に込められた思いや意図を考える活動が想定されている。「考えの形成」においても、「作者がこの作品に込めた思いについて考え、どのような点からそう考えたのかを明らかにして文章にまとめよう。」とあるように主題が意識されたものとなっている。共有では、「考えの形成」で作成した文章をもとに交流し考えを広げることで単元の結びとなっている。

全体を考察していくと、学習のページに記載されている内容は単元を通して学習の見通しが立つものとなっている。着目する部分も示され、表現の独特さや対比にも触れられており、わかりやすいものになっていた。

では、なぜ教員と学習者が難しさを感じているのか。それは前述した「精査・解釈」段階における表現の意図や効果を学習者の想像に任せるような展開の仕方にあると考える。学習者が自己の考えを形成するために視点や対比に着目することは重要である。しかし、宮沢賢治独特の表現を捉え自分の読みの解釈として整理していくための手立てや方法が不明瞭ではないだろうか。そのため作品の表現に着目し全体像をイメージする「構造と内容の把握」から「精査・解釈」の段階に力を入れることが「やまなし」の魅力を活かし難しさに対応した単元にすることに繋がっていく。

学習者に安易に想像させ、「何となくわかった

つもり」で終わるのではなく、読みの解釈の根拠となる叙述に着目したり、学習者の想像を汲み取り言語化・視覚化したりする手立てが必要なのではないだろうか。

4. 実践に向けて

具体的に学習者が作品に向き合い捉えていくためにどのような手立てが効果的なのか。本実践にあたり、今井奈なえ（2013）の提案に着目した。今井は文章全体を把握することを重要視し以下のように述べている。

文学的文章の読みにおいて、「文章全体を把握すること」により、ストーリーの大まかな流れをつかむことができるとともに、感覚的・主観的にではなく、論理的・客観的に、登場人物の相互関係や心情の変化等を読み解くことができると考える。

今井は文章全体を把握しながら作品を読み解くことが論理的・客観的に読み解くことに繋がるのだと述べる。常に全体を意識して読み進めることは細かな部分の読みが全体と結びつくことで表現の意図に気づいたり解釈に繋がったりする。文章全体を把握することにおいて今井が提案したものが「構成図」である。

今井は構成を一般的な意味との差異を踏まえ、全体構成と呼び「全体構成＝物語を成り立たせるための各要素（時や場、人物、出来事）の、時間的な順序を重んじた配列の仕方やそれぞれのかかわり方、つながり方」と定義している。今井は定義を踏まえ全体構成を把握する方法を以下のように述べる。

全体を把握するために必要なことは、端的に言えば「一目でわかるようにすること」である。一目で分かるためには、焦点を絞り、簡潔にまとめ、視覚化することが効果的であると考えられる。そこで、文学的文章の全体を把握するため、文

章全体を「図式化」することを提案したい。ここにいう「図式化」とは、ストーリーの流れや物事の間接関係を理解しやすくなるためのその概略を視覚的に表示することである。

今井は「図式化」を行うことで物語の大まかな流れを掴んだり関係を捉えたりする視覚的な助けになると述べる。三項で述べた視覚化という点で「図式化」は「やまなし」の特徴的な作品の構造を捉え、表現に着目させる手立てにもなりうるのではないか。「一目でわかるようにすること」は学習者にとっても教員にとっても授業の支えとなる。今井の提案した「構成図」の作成の手順は以下のようになっている。

第一段階 ストーリーの流れに沿って、【登場人物】(中心人物と対人物)を配置する。

第二段階 登場人物それぞれの【主な行動や発言】を書き入れる。

第三段階 人物相互の気持ちや行動の【因果関係】が分かるように、線をつないだり、そこから分かることを書き入れたりする。

実際に今井が作成した「構成図」は、人物の配置や因果関係が矢印で結びつけられ、関係する行動や発言、感情が整理されておりとてもわかりやすいものとなっていた。物語の大まかな設定や流れは今井の作成した「構成図」を見れば捉えられるものとなっている。また、今井の「構成図」は作成したものを並べることで「五月」と「十二月」の対比に触れることができる。

しかし、今井の「構成図」の段階では「五月」も「十二月」も情景のイメージを共有することが難しい。今井の「構成図」は全てが文字で整理されていることから、文章と情景を結びつける際にそれぞれが思い浮かべる情景には齟齬が生じる。文字で整理されることから学習者が実際にどのような情景を想像しているかを教員が捉えることも難しい。「構成図」を三項までに整理した内容を効果的に扱う実践して落とし込むためには、さらなる工夫も必要である。

そこで、稿者は「五月」と「十二月」の世界の

全体構造や作品の設定、世界観を捉えつつより視覚的にわかりやすくしたものとして「構造図」を提案する。本来「構造図」とは建物の構造に関する図のことを指すが、作品世界の設定や世界観、それらを支える登場人物や枠組みを表したものとして「構造図」という言葉が適切だと考える。そのため、本実践における「構造図」の定義を以下のようにする。

「構造図」＝一枚の図として表し、簡単なイラストや文字を用いて、作品世界の構造を視覚化したもの。

白石の実践に「構造図」のイメージと近いものがある。白石実践では「自分の読みをまとめる」として図を作成しており、図にする活動を通して情景を捉えていくというよりは対比や額縁構造に気づかせるための手立てとして用いられている。本実践で作成する図は限りなく白石実践でも用いられている図に近い。しかし本実践での「構造図」は、学習者の想像した情景や捉えた表現を確かめながら共有していくものであるため、少し趣旨が異なる。

今井の提案と白石の実践を踏まえながら、五項では「構造図」を用いて行った実践について整理する。

5. 「構造図」を用いた実践

本単元は全8時間のうち第三時と第四時に構造図を用いた。本単元の流れは以下の通りである。

第一時 初読の感想共有 疑問抽出

第二時 単元の課題設定 今後の見通し

第三時 五月の世界を構造図に表し捉える

第四時 十二月の世界を構造図に表し捉える

第五時 五月の世界と十二月の世界を対比

第六時 『イーハトーヴの夢』①

第七時 『イーハトーヴの夢』②

第八時 作品の主題について考える

本項では、実際に構造図を用いて行った実践における学習の展開を中心に整理する。

第三時と第四時は、共に作品世界の構造や全体

像を捉えるための時間である。単元を貫く問いとして「作品の謎を解明していくやまなし学習」を第一時で設定した。そのため、学習者が抱える謎として最も多かったクラムボンについて考え、解明していく時間にするという目的のもと「五月」の世界に迫った。実際に授業が始まると、「五月」の世界を文章だけでは捉えきれない学習者が多い。「五月」の世界を出来事で整理した際にも、「カワセミがクラムボンを殺した」「魚が上にいったり下に行ったりしながら泳いでいる」など、登場人物同士の関係を誤って捉えている様子が見受けられた。また、どこに出来事が描かれ、なぜそのように捉えたかを問うても根拠を持って答える学習者は少ない。学習者の中ではなんとなく読んでいる、わかっている状態で留まり説明ができる段階には来ていない。

そのため、第三時でどのように「五月」の世界を捉えていくのか、その方法を決める段階からスタートした。絵、表、図など様々な意見が挙がり「もっともイメージが湧きやすいものは何か」「絵だと時間がかかり過ぎるのではないか」との考えから、絵を簡略化しつつ図として表すことで合意を図った。「五月」の世界の構造、全体像を捉えることを目的とした「構造図」を一枚、学級全員で完成させることを本時の目標として設定した。まず個人思考の時間を取り各々が一人一枚の「構造図」を作成することとした。「構造図」を作成する上で学習者に意識してほしいこととして以下の三点を示した。

- ・イラストに時間をかけすぎない。
- ・人物同士の関わりを言葉や矢印などで整理しておく。
- ・配置（描く位置）に根拠を持つこと。

一つ目の「イラストに時間をかけすぎない。」は、「構造図」では当然絵の上手い下手が重要なのではなく、自分が捉えた五月の世界を図示することが目的である。そのため、魚やカワセミなどを文字で表したり丸や三角で簡単に表現したりするこ

ととしている。また、クラムボンについても明確な姿はなく個人の読み取ったイメージになるため、自身がイメージしたものを簡単なイラストで表しても良い、クラムボンとだけ書いておくことも良いとしている。学習者が「構造図」を作成する段階で躓かないための手立てである。

二つ目の「人物同士の関わりを言葉や矢印などで整理しておく」では、かわせみと魚の関係や、かにの親子から見たかわせみの様子など人物同士の関わりや影響が表れている描写については矢印を使い文字で記載しておくなどして図に表すことを求めた。人物同士の関係や影響が表れている描写に着目させることで、学習者が細かな表現の効果に気づこうとする姿勢を生み出し、学習者の読みの誤りや各々の読みの差異を表出させるための手立てである。

三つ目の「配置（描く位置）に気をつけること」では、図示する際にどこに表すのかを意識することを伝えた。「やまなし」は、かにの親子の視点で出来事が語られている。手引きにもあったように視点がどこにあるのかを踏まえ、何度も本文に立ち返り、どのように表現されているのかを考えた上で捉えたものを図示するためである。

上記の3点を共有し、「構造図」の作成に臨んだ。多くの学習者に描かれているものが足りなかったり誤って捉えていたりする様子が見られた。特に学習者の中で、捉え方に差異が多かったものは「クラムボンの位置」「カワセミと魚とクラムボンの関係性」「魚の数」である。各々が作成した「構造図」を元に「魚はどこに書くと良いだろうか」「クラムボンはどこに書いてあるか」など問いながら一枚の「構造図」を黒板に作成していった。

学習者の提出した「構造図」を全体共有しながら、黒板に表していく中で、なぜそう表したのか、その根拠はどこにあるのかを問うと叙述を読み上げる学習者の姿を見ることができた。「コンパスのようにと書いてあるからクチバシが水面に突っ込んでくる」や「魚は襲われてから登場しないから一匹しかいないのではないか」「クラムボンは泡だと思っからかにの親子のすぐ上に書くべきだ

と思う」など叙述を捉えながらも生まれる読みの解釈の違いや誤りに気づく時間が生まれた。それぞれの読みの違いや誤りを学級全体で深めていくような時間であった。捉えの誤りを指摘したり違う捉え方をしたりした学習者に考えを説明しても

らうことで納得を得ながら黒板に表すことができた。

実際に学級で完成した「五月」の「構造図」(図1)では、クラムボンが様々な場所に書かれ、かわせみの向きやオノマトペにも着目している様子



図1 五月の構造図



図2 十二月の構造図

が見られた。またカワセミ、魚、クラムボンの関係性を食物連鎖として捉えた学習者の姿も見られた。

完成した「構造図」には、登場人物同士の関係性や「五月」の世界の情景が簡単に整理されている。各々が作成した「構造図」は多様であり、改めて叙述から想像する情景は学習者にとって異なることを認識した。また、同様の手順で次時に作成した「十二月」の「構造図」(図2)でも、「十二月」の世界の構造が視覚的に見やすく、学習者が想像した情景がわかるものになった。

「構造図」の作成を通し「なぜタイトルは『やまなし』でなくてはならないのか」「五月の世界はいらないのではないかと疑問が生まれ第五時では、三～四時で作成した「構造図」を元に両者の違いや、「十二月」のやまなしに込められた思いやいとを捉えるために対比する学習へと繋がった。

6. 成果と課題

作品の表現や構造に着目させるために「構造図」を用いた実践を行った。成果として、学習者の捉えた作品の構造、着目した表現を表出させることで教室内に作品の世界を視覚化ができた。教員にとっては、学習者の想像している情景を捉えることができ、学習の進め方や手立てがイメージできた。学習者にとっては「構造図」を作成し、視覚化される過程で学習の拠り所となったのではないか。

一方で「構造図」は静止画であることから、時間の経過による変化を視覚化することに課題が残る。登場人物は時間と共に変化したり、行動を起こしたりする。しかし、一枚の「構造図」に表すことで、時間の経過による変化に焦点を当てることなく単元を終えてしまった。今後は作品世界の時間の経過による変化に意識を向けられるような手立てを講じていきたい。

引用・参考文献

- ・今井奈なえ (2014) 「物語教材の全体構成の把握に関する研究—宮沢賢治童話の対比的構成に着目した指導法の開拓—」『上越教育大学国語研究』28頁
- ・甲斐睦郎他編著 (2020) 『国語六創造』光村図書
- ・佐々木俊幸・西尾一 (1986) 『教育技術の法則化双書② 分析批評による「やまなし」への道』明治図書
- ・白石範孝 (2016) 『白石範孝集大成の授業「やまなし」全時間・板書』東洋館出版社
- ・東京学芸大学国語教育学会 (2023) 『小学校・中学校・高等学校を見通した12年間の「文学」の学び』東洋館出版
- ・山口憲明 (2013) 『文学の授業⑤ やまなし 教材分析と全発問』本の泉社
- ・山中吾郎 (2003) 『文芸研の授業①文芸教材編「やまなし」の授業』明治図書

(黒川 壘 北海道教育大学教職大学院・院生)

(森 健一郎 北海道教育大学釧路校教授)

